

獄中からの恋歌——ナズム・ヒクメットとイスラーム神秘主義

石井 啓一郎*

1. ナズム・ヒクメット——日本に初めて受容されたトルコ現代文学者

ナズム・ヒクメット (Nâzım Hikmet, 1902-63) は戸籍上 1902 年、実際は 1901 年にオスマン帝国領のセラーニク(現ギリシア領テッサロニキ)に生まれ、1963 年に当時ソ連のモスクワに亡命中世を去ったトルコの詩人である。ノーベル文学賞受賞という快挙を遂げたオルハン・パムク以前では実質的に、最初に日本で一定の知名度を得たトルコの現代文学者である。1951 年に当時のソ連へ亡命するまでの間の彼の半生は、逮捕・勾留と釈放を幾度も繰り返すものだった。1938 年には軍事法廷で 28 年 4 か月の禁固刑に処せられ、以後まずはイスタンブールからチャンクルの監獄へ移送され、最終的に 1940 年アナトリア北西部のブルサにある監獄に収監されて、12 年の長きにわたる獄中生活を余儀なくされている。

トルコ共和国建国の父ともいえるべき、ムスタファ・ケマル・パシャ——後の共和国初代大統領アタテュルク——は、第一次世界大戦の敗戦国となったオスマン帝国が、英国、フランスなどの欧州諸国に分割され国家存続すら危殆に瀕した時期に、内部的にはイスタンブールのオスマン朝スルタンの政府と対立し、対外的には英国の後ろ盾を得てトルコへ侵攻したギリシャに代表される外敵と対峙した救国戦争の時代に、対ソ連の外交関係や内政での対共産主義に難しい舵取りを強いられていた。ムスタファ・ケマルは結局、共和国樹立前に反共政策へと舵を切ることになるのであるが、ヒクメットは救国戦争に身を投じる過程で共産主義運動に共鳴してモスクワへ留学する。帰国後にトルコでの政治活動に関わり、新生共和国の統合すら脅かす危険思想の持ち主として官憲から睨まれて、幾度も逮捕、投獄、釈放を繰り返す前半生を送った。

1938 年の軍事法廷判決で過酷な量刑を言い渡され投獄された時から、死後 2 年を経過する 1965 年までナズム・ヒクメットの著作はトルコ本国で全面的に発禁処分が付されていた。1960 年代前半ヒクメットが日本に紹介されたのは、いわゆる「冷戦」の只中であつた。この時期は、左翼運動の世界的に盛り上がるなかでマスコミ・情報通信が発達し、ソヴィエトのプロパガンダ活動・ネットワークなどがかつてない規模で機能した時期でもあり、主として「反帝」のイデオロギーを基盤にした詩が世界的に共有される時代だったといえる。実質的に日本共産党中央委員会出版局の別動隊のような存在であつた新日本出版社が、51 巻に及ぶ「世界革命文学選」を刊行したのは概ねこの時期であつた。そのような時期に祖国で発禁にされた彼の作品は、ソヴィエト・ロシア文学研究者たちの手によってロシア語からの重訳で紹介されることとなった。

被爆国日本では、広島への原爆投下から 10 年を数えた 1955 年前後に、ヒクメットが広島や第五福竜丸といった一連の核兵器をテーマに詩を詠んだことが注目された。特に彼の小規模な一篇であり、『死んだ少女』(中本信幸訳)の訳題で日本では代表作と知られる *Kız Çocuğu* が、日本人の琴線に触れる歴史的悲劇を題材として扱ったことでセンセーショナルな作品となり、日本の左翼運動や市民運動の文脈で半ば独り歩きして彼のひとつのイメージを形成した。ただ、こうしたヒクメット受容の在り方には功罪相半ばする面があると言えよう。少なくとも、ソヴィエト・ロシア文学サイドからのアプローチがなければ、オルハン・パムクの登場まで日本にトルコ文学の存在が認知さ

* 文学翻訳者・中近東現代文学(イラン、トルコ)

れることすらなかった可能性はあった。しかしヒクメットが「革命文学者」としてロシア語化され、当時のソヴィエト・プロパガンダによって一面的なイメージを付与されてしまったのも事実である。時代の変遷とともに、ヒクメットは一面的な固定化されたイメージのゆえに、あたかも「時代遅れの流行歌」のような存在になってしまったのである¹⁾。

2. 本報告において意図するもの

我が国でこのような一面的なイメージが独り歩きしたまま、「ベルリンの壁」崩壊以後、少なくとも共産主義が歴史的使命を終えてしまったかのような状況下にある2012年現在、我が国において十分に知られぬうちに、半ば忘れられたような存在になったヒクメットを、政治社会的価値観のみで見るのではなく、日本では知られていない、文学者としての独創性に着目し紹介することを目的とする。その際、作品における宗教的テーマの一断面に焦点を当てて、彼の精神的な歩みを辿るための一考察とするつもりである。12年にわたるブルサの監獄での日常空間から隔絶された生活のなかで、相まみえることの叶わない妻ピラーイエへの思いを綴った作品が多く生まれるが、そのなかでも、最も前衛的な一篇として評価の高い『四行詩集 *Rubailer*』、また同じ監獄収監中に書かれた傑作戯曲『フェルハドとシリン』を取り上げて、イスラーム的テーマにヒクメットが創作手法上どのように向き合ったかを考察する。

3. 1938年からの投獄生活の背景

ヒクメット略年譜にあるように、ヒクメットは1929年以後、政治犯として逮捕、投獄、釈放を幾度も繰り返している。しかし、そのなかでも、1938年からの12年の長きにわたった投獄は、それまでの逮捕、投獄と異なる意味を持っている。これは、かなり異常な状況下で行われた政治的裁判の結果であったことに注意する必要がある。トルコ救国戦争を完遂する以前、イスタンブールのオスマン朝スルタン政府を否定したムスタファ・ケマルのアンカラ政府は、これをいち早くトルコの正当な政権として外交的に認知したレーニンとの間に、盟約関係を結んでいた（1921年モスクワ）。しかしイスラーム国家への対立概念としての「トルコ人（*Türk*）の国民国家」樹立を志向したムスタファ・ケマルも、カリフ権を持ち、ムスリムに一定の権威と影響力を行使し得るイスタンブール政府に対して、「無神論者の共産主義政権」との盟約関係は救国運動の崩壊を招く危険もあり、また未だアンカラ政府内部を完全に掌握できていなかった状況下で、ソヴィエト政権及び共

1) 1965年にトルコでヒクメットの作品が解禁されて以後、日本では、いわば受容の端緒となったロシア・ソヴィエト文学者たちの活動の後に続く動きがなかったこと、トルコ語原典からヒクメット作品を積極的に紹介するような動きが（少なくとも商業出版という形での発信が）ないまま今日に至っているということ、そしてトルコ語原典を活用した研究や翻訳が可能になったにも関わらず、ヒクメット作品のみならずトルコ文学作品の紹介が継続しなかったことの原因は筆者も定かには分らない。あくまでも推測にすぎないが、60年安保闘争から全共闘運動に至る約10年を経てはじまる東大安田講堂事件（1969年）、連合赤軍浅間山荘事件（1972年）などに続いて、内ゲバや「総括」の名のリンチ、連続企業爆破事件やハイジャックのような、破壊的で反社会的な行為に傾倒する迷走ぶりが、「革命の理想」と現実の乖離に由来する幻滅を引き起こしたこと、さらに1964年の周恩来・ブレジネフ会談で中ソ対立が修復不能であることが公然と知られ、ブレジネフ体制下でソヴィエトの衰退と権威失墜、そして後に起こるベルリンの壁崩壊とソヴィエト解体という歴史的な大転換の流れが少しずつ見えてきた時代のなか、「革命文学」という概念自体が陳腐化するという問題があったのではないだろうか。また、ソ連時代に刊行された露訳版をトルコ語原典と比較すると、露訳版の信憑性に疑問の余地ある箇所が散見され、しかも単なる「誤訳」の範疇に収まらず、ソ連当局の何等かの政治的作為が介在した可能性の疑義を禁じえない場合がある。輕輕な断定は慎むが、政治的忖度が介在したことを疑う余地ある底本からなされた重訳は、原作品を歪めていることさえ危惧される。例えば1958年の作品 *Umut* において *yapma aylar*（つくりものの月の群）の比喩は、時期的に当時のソ連が国威をかけたイベント計画に基づいて軌道に投入された複数の衛星を指しているものであることに疑いはないと考えられる。しかし詩的イマジナリーとしての斯かる比喩に、単純に「衛星」を意味し、剰えその国家的プロジェクトの固有名詞でもある *спутники* を訳語としてあてはめることの妥当性には疑義を呈してもよいと思料する。

産主義への対応に苦慮していた。ヒクメットは、救国戦争に参加する過程でマルクス主義の洗礼を受け、共産主義思想を学ぶ目的でモスクワの東方勤労者共産大学（Коммунистический университет трудящихся востока: KUTV）へ留学に旅立つが、その同年1921年1月29日に、当時コミンテルンの認知を受けてアゼルバイジャンのバクーに創設されたトルコ共産党のムスタファ・スプヒがアンカラ政権との共闘を模索して、アンカラを目指すも、ひどい嫌がらせを受けた挙句にアンカラ入りを果たせず、帰路の黒海航行中、船上で惨殺される事件が起こっている²⁾。つまり、ヒクメットがソヴィエトを目指したその年に、既にムスタファ・ケマルが共和国樹立後に見せる反共政策を暗示する出来事が生じていたのであるから、そもそもヒクメットがソヴィエトを目指した時点で、来たるトルコ共和国で共産主義運動に身を投じることに對する逆風が既に予見可能な状態であったともいえるのである。

1938年の軍事法廷での裁判は、法廷の審理では共産主義運動を駆逐できないという状況に苛立った参謀総長フェヴズィ・チャクマクがシナリオを書いた裁判であるといわれる。このとき、士官学校生がヒクメットの著書を所持したというだけの理由で、軍律を乱し、上官への反抗、叛乱行為をも教唆しているという罪状で、まず軍士官学校での軍事法廷で禁固15年の判決をうける。それから、マルマラ海上に係留された軍艦の喫水線以下にあった船倉内に幽閉されて、艦内に設置された軍事法廷（秘密法廷）で、28年4か月の禁固刑³⁾が宣告される。実質的にヒクメットを終身刑に処することを狙ったような判決であった。

この裁判は、一事不再理や法の不遡及といった⁴⁾、通常の刑法や刑事訴訟法の基本原則にも反し、政治的な思惑に左右されたものであった。このヒクメット裁判については、民間人に対する軍刑法の適用要件や、軍事法廷の一般人への管轄権をめぐる、当時の司法省と国防省の間での対立が生じたが、結果的にはチャクマク参謀総長が企図したままに押し切った格好であった。ヒクメットは最終的には、大統領アタテュルクへの請願まで試みているが、本事案は既に死を目前に衰弱していたアタテュルクにも介入不能な状態にあったと伝えられる。

4. ヒクメットの獄中からの妻への恋歌

軍事法廷に起訴されてからヒクメットは、12年間を監獄で過ごすことになる。いわば「塙の中」、鉄格子のなかで、1935年に結婚した妻ピラーイェ・アルトゥノールに対する思いを詠んだ作品が、多く書かれることになる。

そのなかで『四行詩集』は、ヒクメットがピラーイェに宛てた書簡で、「ルーミーに対する、弁証法的唯物論に基づく批判を行う詩集となり、西洋にも東洋にもなかった試みとなる」として構想を伝えた作品であり、ヒクメット研究者の間でも、彼の最もユニークな作品として評価される。ヒクメットのピラーイェに綴った言葉によれば「『神への愛』のままにルーミーが造りだしたものと逆のもの。つまり『實在』を貴女の愛のままに作品にするのだ」⁵⁾という。

2) 新井政美『トルコ近現代史——イスラム国家から国民国家へ』（みすず書房、2001年）169-178頁。

3) Memet Fuat は、この量刑が、両軍事法廷の量刑を合算（35年）のうえ、情状に配慮し減刑して決定されたとするが⁴⁾（p.19, *Nazım Hikmet üstüne yazılar*, İstanbul: Adam Yayıncılık ve Matbaacılık A.Ş., 2001.）、Saim Gökse と Edward Timms は海軍法廷が20年の量刑を一旦定め、さらに懲罰的な刑期が加算されてこの量刑が決定されたとしている（p.156, *Romantic Communist, the life and work of Nazım Hikmet*, London: C. Hurst & Co., Ltd., 2006.）。

4) ヒクメット略年譜を参照のこと。

5) p.221, *Nazım Hikmet Piraye'ye Mektuplar – 2*, İstanbul: Adam Yayıncılık ve Matbaacılık A.Ş., 1998.

5. ヒクメットのブルサ監獄時代までの宗教観の変遷と、『四行詩集』の唯物主義的批判の対象となったルーミーの思想との関連について

マウラーナー・ジャラルルーディーン・ムハンマド・ルーミーは、西暦 1207 年に現在のアフガニスタンのバルフに生まれ、ペルシア語古典の神秘主義文学で最高峰として知られる人物である。特に長大な神秘主義詩『精神的マスナヴィー』（「マスナヴィー」とはアラブ起源のイラン古典詩のひとつの詩形式）、『シャムス・タブリーズ詩集』などはペルシア語古典文学の最高峰として知られる。マウラーナーはアラビア語で「我らが師」の意味であるが、ペルシア語ではモウラーナー、トルコ語でメヴラーナーと発音される。彼はバルフから西へ向けて遍歴し、最後は現在のトルコのコンヤを終の棲家とし、俗に「踊るデルヴィーシュ」などといわれる旋舞儀式で有名なメヴレヴィー教団⁶⁾という神秘主義教団（タリーカ）の基礎を築き、1273 年に同地で世を去った。

ヒクメットは、晩年の 1961 年に書いた『自叙伝』という詩の一節において⁷⁾

僕はオペラに行った

多くの人は行くこともなく、オペラの名さえ耳にしなかったものを

1921 年から、僕は多くの人が詣でる場所にはどこにも行っていない

ジャーミイも、教会も、寺院も、シナゴークも、まじないごとにも

でもコーヒーで僕のことを占うことはできるのだ⁸⁾

と、詠んでいる。

もともとはオスマン朝時代の宮廷に奉職した名門の家柄に生まれ、祖父のナーズム・バシャがこのメヴレヴィー教団の熱心な信奉者であったため、少年時代には同教団において、メヴラーナーの教えに帰依し、教団の祖たるメヴラーナー・ルーミーに対する賛美の詩も書いていたほどであった。そのような少年時代を過ごしたヒクメットが、共産主義に傾倒しモスクワへの留学に至る過程で、多くの人々が詣でる場所から自らは遠ざかったと述懐している。これは、多くの人に無縁な見聞（オペラ）と対比して、多くの人の日常性の中に組み込まれた（俗信も含めた）宗教的で「聖なる場や事物」からは自分は隔たったということを、多少のユーモアを交えながら語っていると言えよう。

そのモスクワ留学以後に共産主義的な思想教育を受けた結果、労働者を搾取する側のブルジョワ階級やツァール（ロシア皇帝）に与し、虐げられた貧しい者に何も救いをもたらず、「天国の御伽噺」を語ることで欺罔するだけの宗教、搾取・被搾取の構造をむしろ助長しているものとして、社会存在としての宗教への批判に転じてゆく。たとえば 1921 年、モスクワ留学時代に書かれた詩篇『革張りの本』は、クルアーンに対する痛烈な揶揄的表現に始まり、イスラームのみならず、キ

6) メヴレヴィー教団は、政教分離を国是とするトルコ共和国が成立した後の 1925 年、ほかのすべてのタリーカとともに閉鎖され、有名な儀礼の際の旋舞だけが観光上のパフォーマンスとして限定的に許容されるのみであった。しかし近年はトルコの文化的遺産として、さらには「ヒーリング」、心理的・精神的「リラクゼーション」や哲学など、いわゆる宗教と少し離れた活動として認知され、徐々に領域を広げてきている。さらに、旋舞を伴う儀礼が 2008 年に無形文化財としてユネスコに承認されてから、一層いわゆる「宗教」とは違った切り口で認められ、求められている状況にあるといわれる。また現在のトルコの政治が、比較的親イスラーム的になっていることも手伝って、現在は、メヴラーナーや預言者への賛美、崇敬、帰依を表明する典礼文や、参列者の唱えるズィクルの言語的朗誦で進行する前半部と、独自の宗教音楽演奏を伴う有名な旋舞からなる後半部まで含めた一連の儀礼（全部で三時間に及ぶ）を、イスタンブールのメヴラーナー文化センター（Mevlana Kültür Merkezi）という団体が真正な姿であるとして定期的に執り行い、部外者の見学も受け入れている。

7) 本稿においては特に注記ない限り、ヒクメットの詩句の日本語訳は筆者自身によるものである。

8) *Otobiyografi*, p. 105, Nazım Hikmet, *Son Şiirleri, Şiirler* – 7, İstanbul: Yapı Kredi Yayınları, 2002.

リスト教も痛烈な批判の俎上にのせた一篇となっている。

さらにこの『四行詩集』の第一部に収録された詩篇において、彼はルーミーの形而上学的な世界観⁹⁾に対して、弁証法的唯物論的な視点からのアンチテーゼを真っ向から投げかけている。

ルーミーの思想のうちヒクメットが批判の対象としたのは、本作の第一首に端的にあるように、「形相は常に影である (Suret hemi zillest)」というテーゼである。彼はメヴラーナーに対して呼びかける(『四行詩集』第一部第一篇)¹⁰⁾。なおヒクメットがメヴラーナーの言葉であるとして言及している詩句を、筆者は現時点までにメヴラーナーの『四行詩集』のペルシア語原典¹¹⁾の中に同定できていないので一定の留保を要するが、本稿における「形相」の訳語は、様相、形という意味において用いており¹²⁾、哲学用語としての「形相、質料」の意味においてではない。

おおジェラーレディン。貴方が見たのは真の世界で、まやかしのごときものではない
果てるところもなく、隅もない、そして創られてもない。それを造ったのは第一原因などというものでもない。
そして貴方の熱い身体から生まれる四行詩で、もっとも偉大なもの。それは『形相は常に影なり』などとはじまるものではない。

つまり、あなたの詩の一番上等な一句といえ、決して「形相は常に影である (トルコ語原文 Suret hemi zillest は、ペルシア語の Šūrat hamī zill ast)」などから始るものではない！世界はいかなる創造的な力が働いてできたものでもなければ、第一原因などというもののから作られているのではない！世界は、現実存在し、それ自身が確たる実在を備えている。とルーミー的な世界観をまず否定する¹³⁾。

9) もともとスーフィズムというのは、もともとスーフィズムというのは、イスラームで本質的に超越的な存在であるとされる神アッラーを、人間が愛と欲求の対象として捉え、人間が天地創造以前の自分の本源的故郷であるかのように、神を求める精神的な運動と言える。東京外国語大学の藤井守男先生の言葉を借りるなら、ホラーサン派神秘主義は、神秘修養を通じて得られる不可視界の直感的照明体験に基づいたスーフィズムであり、ルーミーらのペルシア語詩文のなかにその文学的表出の形象がみとれる(藤井守男「スーフィズムとイラン文化」森茂雄編『イランとイスラーム——文化と伝統を知る』(春風社、2010年)99-111頁)。同じスーフィーとして有名な、ムフィッディーン・イブン・アラビー(1240年没)、フサイン・マンズール・アル＝ハッラージュ(922年没)といった人物の思弁的で理論的な傾向よりも、詩という文学ジャンルに長い伝統を誇るイランの文化のなかで、ルーミーは詩の形式で物語を誦み、「象徴」としての言葉のなかに、神と人間との関係性をよりイメージに強く訴える手法で表現する。

10) Nazım Hikmet, *Kuvâyi Milliye: Şiirler 3*, İstanbul: Yapı Kredi Yayınları, 2002.

11) Jalāl-al-dīn Muhammad Balkhī, *Tarānehā-ye shūrāngīz-e Mowlāwī (Rubā 'iyāt-e Mowlāwī)*, bar asās-e noskhe-ye Ostād Badi' al-zamān Forūzānfār, Tehrān: Enteshārāt-e Ferdūs, AH1381.

12) N. Gürsel によれば、Suret の語の正確なフランス語の訳語は“forme”或いは“apparence”である。Nedim Gürsel, *Nāzīm Hikmet et la littérature populaire turque*, Paris: Editions L'Harmattan, 1987, p.88.

13) ルーミー語録に「すべては『真(al-Haqq)たる神』の影にすぎない(Hama zill-i haqqand)」という言葉が残っている(Mawlānā Jalāl al-Dīn Muhammad Rūmī, *Maqālāt-e Mawlānā (fihī mā fihī)*, (Vīrāyesh-e matn) Ja'far Modarres Sādeqī, Tehrān: Nashr-e Markaz, AH1382, p.145)。ルーミーによれば、すべての被造物の裡には、神の命じ、意図することがある。だから、本体と影の関係のごとく、手の指を広げれば、影も同じに指を開く。礼拝へ行けば、影も等しく跪く。そして人間の探究の本源は、愛する者を探し求めることにあり、誰もが神に恋い焦がれる。すべては神が「影」のなかに顕す、意図であり、属性である。影としての人間は、真実の存在としての神を愛し、欲求するように運命づけられているというのが、ルーミーの世界である。

ルーミーは自らの語ること、アラビア語、ペルシア語でいう「寓意 mathal」ではなく、「象徴、符牒 mithāl」であるとの語を残している(Har cha gūyam mithāl ast) (Mawlānā Jalāl al-Dīn Muhammad Rūmī, *Maqālāt-e Mawlānā (fihī mā fihī)*, p.189)。人間が体験する、超越的で永遠の存在である神の至高の階梯を言葉に表そうとしても、地上に、神と比肩する存在はないのだから、神から受ける照明体験は通常の言語形態である寓意や類推を越えている。このときすべて神と人間関係を語るのに有効なのは「象徴、符牒」である。ルーミーがいう象徴とか符牒というのは、通常の論理で把握しきれない個人の主観的精神体験を、信憑性と体感とをもって他人が知ることができ、受容できるような言語表現のことである。彼は、夢であれば、覚醒しているときには一様にしか見えないものが、百、千もの姿に見える、あるいは、眼を閉じると、眼を見開いたら知覚できない形象・形態を、感得し、実感することができる、といった例を挙げる。天使や神が属する神秘的に高い階梯にある世界を言い表すため、

ヒクメットは、まずこの四行詩集の第一首でルーミー的な世界観を真っ向から否定したあと、その世界における確たる実在である愛しい人、具体的には、獄中に隔てられてまみえることの叶わない妻を、肉感的、官能的ですらある、確かな実在として、また愛の対象として詩の核心に据える。そしてヒクメットの考えるルーミー的世界観——真の実在を欠いた世界に主体的な意思のない影として、神の意志のまま、人は神を求めるという、「神への愛」に基づく世界観——にアンチテーゼを投げかけてゆく。

この四行詩集の第一部では、鉄格子の内と外の世界に分け隔てられ、実際に相まみえることの許されない状態の妻に対する慕情が謳われるが、そこでヒクメットは妻の存在と、その妻の肉体に対する官能的な思い出や記憶を、「幻影 *hayāl* (ペルシア語 *khayāl*)」という言葉で表現する。しかし、その「幻影」は、ルーミー的な象徴・符牒としての詩的言葉（注13を参照のこと）のなかでは、超越的存在者であり愛の対象たる神の「シンボル」であり、それ自体に実在のないものとして顕れる。ルーミーの四行詩集においても、この「愛する者の幻影」という概念は登場する。ルーミーは四行詩集の1775番で、

愛しき者よ、そなたの幻影は我が眼のまろうどとなり
 そなたは善の素材にして、我が眼へ染み入り、我が故郷を創る
 我が両眼は、そなたの幻影に仕える酌人となり
 我が眼は告げた「我がまろうどよ、望むだけ我が涙を呑むがよい」と¹⁴⁾

という詩篇を詠んでおり、「愛しい人の幻影」は、まさに愛の対象としての神の顕現である。その一方、ヒクメットは表面的には類似した言葉を意図して使いながら、それはまったく異なる文脈のなかに活きて、生々しく肉感的で官能的な妻の実在を、妻と引き離され、隔てられた閉鎖空間のなかで思い起こすシンボルとして詩のなかに用いている。ヒクメットが用いる *hayāl* の語は、ルーミー的なシンボルではなく、あくまでも愛する女性が遠く離れた場所に確たる実在を持っていることが前提で、自身が獄中のなかにあり、彼女から隔てられた状態でみる、その実在者のシンボルとしての幻影になる。つまり、ヒクメットとルーミーでは「愛する対象」への呼びかけの言葉に使う「*hayāl*」の語法が表面的に似ていても、まったく異なる意味合いにおいて使われているという点に注意が必要である。ヒクメットは以下のように詠む。

僕の愛する人の幻影が鏡面で語った。
 ある時僕に言った「彼女はいません、私がいます」。
 僕は鏡を砕いた。鏡は砕け散って、幻影は姿を消した。
 だが、嬉しいかな。僕の愛する人は、あるべきところに留まっている。

主観的体験を言語化し、再現、認識すべき符牒、象徴を自分は語るのだとルーミーは述べている。ルーミーの詩的言語は、天使や神の世界を体験する精神現象、心理現象を、まさにこの直感的な「象徴・符牒」というものを縦横無尽に駆使して表現するため、必然的に詩的なイメージが豊かになってゆく。なお、本稿での「寓意」「象徴・符牒」の訳語は、H. コルバンが *mithāl* の概念を“symbole”と訳する一方、それと峻別すべき対立概念として“allégorie”を用いていることから、ルーミーの用語を本稿において日本語に移す際にもこれを踏襲していることを付言する。Henry Corbin, *Avicenne et le récit visionnaire*, L'Île Verte-collection dirigée par Gilbert Durand, Paris: Berg Internationaal Éditions, 1979, p. 39 ss 参照。

14) Jalāl-al-dīn Muhammad Balkhī, *Tarānehā-ye shūrāngīz-e Mowlāvī (Rubā'iyāt-e Mowlāvī)*, p. 309. このルーミーの詩篇の解釈は Şefik Can 訳によるトルコ語版に依拠した。Mevlana Rubailer, (çev.) Şefik Can, (haz.) Recep Kibar, İstanbul: Sahaflar Kitap Sarayı, 2008, p. 309.

（『四行詩集』第一部第三篇）

ルーミーにおいては、『精神的マスナヴィー』の第一巻 3459 行以後で、鏡は神を求める修行者、求道者の心を象徴するものとして描かれ、心の鏡を透明なまでに磨き上げれば、そこに「修養によって磨かれ、透明になってゆくにつれて、師や書物を介さずに預言者の叡智を感じ得ることが可能な人の心」が生じる。つまり鏡は神を感じ取る器官としての人の心の象徴である。ヒクメットの詩は、ルーミーにとっての神を感知する人間の器官である鏡を破壊してもなお、世界のなかで「あるべきところには」、愛する人の実在は確実にあり、自分は対象の実在を確言すると宣言する。ルーミーにとっては、真実の存在は鏡面に像を結ぶものと同一化されているので、鏡を壊すことは真の実在を壊すに他ならない。けれど、ヒクメットの場合は、鏡を壊すことは、実在そのものを壊すことではなくして、実在が放つ虚像を壊すことでしかない。それは第一篇におけるルーミーに対する挑戦的宣言と相通ずるアンチテーゼであろう。

脂を染ませた粗い布に、君の絵を一度だけ描いてみた。けれど
日に千度でも君の絵姿は顕れる、僕の頭頂から爪先まで全身に
実に可笑なことだ。君の幻影はただそこに留まって
画布のほうが僕より命は長い

ここに引用したのは『四行詩集』第一部第四篇であるが、ヒクメットはキャンバスに描いた妻の肖像、つまり「幻影 *hayāl*」が、牢獄によって妻も含めた日常の世界から隔絶された空間において、現実以上の現実に変質してしまうという、ひとつの心理的現象、心象が詠われる。描かれた妻の肖像は、妻の実在への確信と体感および肉感を伴った記憶と不可分なものとなった「幻影」あるいは「仮象」としての肖像であるからこそ、ルーミー的な、絶対者と人間の関係性のなかにある実体を持たない「影」のごとき存在とは明快に峻別すべきものとして認識される。結果として、妻の肖像を描いたキャンバスは自分以上の長い命を得たと彼は語る。

ここに至り、ヒクメットは、創造主としての唯一神によってつくられた被造物としての世界と、そこに君臨する神の意思といった概念に対して、世界は自律的、自足的に存在しているのだという考えを示すのである。その結果、ヒクメットの世界観はイラン古典詩で最も西欧で知名度の高いオマル・ハイヤームの悠久の自然や世界のなかに存在する人間の有限性への怨嗟と蹉跎といった感情を披歴した作品と相通ずるものとなる。

この庭園、この湿った土、このジャスミンの香り、この月夜
僕が消え失せようと、煌めき続けるだろう
なぜなら、僕が来ぬうちから、僕が来てから後も、僕に関わりなく存在したのだ
そしてこの確かな実在が、僕にもその姿を顕現したに過ぎないのだから……

（『四行詩集』第一部第七篇）

蜜が満ちた巣蜜
それは陽の光でいっぱい君の両眼……
君の両眼は、僕の愛しい人よ、君の両眼は明日にも土埃になるだろう

蜂蜜は、また他の巣蜜を満たし続けるだろう……

(同 第一部第十篇)

必ずしもハイヤーム作品の直接的引用ではないにせよ、自分がこの世に存在していようがいまいが、世界は存在し続ける。自分の生涯、生命や寿命と無関係に存在する世界というオマル・ハイヤームを思い起こさせる詩句である。愛しい貴女も自分も、皆いずれは死ぬ身。けれど、それと関係なく世界は存在する。そこに生まれ、そこから消えてゆく自分、こうした主題には、オマル・ハイヤームの無常観が共有されている。しかしヒクメットは、この作品の第二部において、このオマル・ハイヤームを名指して、ルーミーに次いで批判の対象とする。ヒクメットは「死と人生の短さを甘美な憂愁 (tath bir keder) とともに思い、葡萄酒を飲み、チューリップの花園で月を愛でた」(『四行詩集』第二部第二篇)という言葉でハイヤームを批判し、物質的、経済的に恵まれないままに日々を生きねばならぬ人々を思い、心に留めて、「僕は一人の人間／僕はトルコの詩人にして共產主義者、ヒクメット／頭頂から爪先まで信念があり／頭頂から爪先まで闘争と、離別と希望からできている。それが僕だ……」(『四行詩集』第二部第五篇)と詠っている。つまり、彼は悠久の自律的存在である世界のなかにある有限の存在としての自分自身の意識を第一部で詠う。そして、その世界における一人の闘士としての実存の意義を確信すると第二部において確言する。

6. ヒクメットのイスラーム神秘主義的表現についての若干の補足考察

獄中であって隔てられ、愛しい者とまみえることの叶わぬ境遇のなかで、一方ではルーミーの思想へのアンチテーゼを提示して、確かな実在としての妻への想いを詠った『四行詩集』にこれまで言及してきた。同じく獄中で書かれた、名作戯曲『フェルハドとシリン』も妻ピラーイエとの離別の感情が色濃く読める一篇である。しかし、本作では遠くに離れた愛しい存在が、むしろ具体的な個人としての存在を失ってしまい、困難な状況に苦しむ人々へ自己犠牲的な行動で身をささげることへの原動力としての、絶対超越的な存在と変質してしまうという、『四行詩集』と異なる心理が描かれている。

『フェルハドとシリン』では、アルゼンの街の女王メフメネ・バヌが、瀕死の病に伏せた妹シリンの命を救う代償に、謎の訪問者が求めるまま自分の美貌をシリンに与え、シリンのために離宮を造営すると、その離宮の装飾を担当した絵師のフェルハドとシリンが恋に落ちる。しかし、シリンのために美貌を失ったメフメネ・バヌもフェルハドを愛してしまう。姉はシリンを娶える代償として、フェルハドにアルゼンの民のために、鉄の山という誰も穿つことができなかった山に水路を掘ることを条件として提示する。フェルハドはそれを受諾して、鉄の山の坑道にこもって11年を数えることになる。しかし11年目を迎えた日のフェルハドの言葉は、彼がシリンの顔を思い出すことができなくなったというものであった。忘れたわけではなく、顔という具体的なシリンの姿が思い出せない。シリンを娶るための試練が自己犠牲的で英雄的な人々のための行為に変質してゆく過程は、『四行詩集』の例と異なり、むしろイスラーム神秘主義的な「神と人間」を象徴する言語に近接していく。ここでは、顔を思い出すことはできないが忘れたわけではない、という幻想化されたシリンが、個人の愛以上に普遍化された倫理的使命、ミッションへと彼を導く「現実を超える幻想」へと変質している。戯曲第三幕の大詰め場で、結局メフメネ・バヌが、ほかならぬシリンを遣わして、フェルハドに課した試練を赦免するという知らせをもたらしても、フェルハドは結局それが永遠の別れになるであろうことを予感しながらも、メフメネ・バヌの赦免を固辞して、なお

山に籠ることを選択する。そのとき、現実を超える幻想となってしまったシリンの姿に導かれるフェルハドの姿は、ある意味では、絶対超越的な存在であると同時に神秘的な愛の対象としての神と被造物としての人間という存在の関係性を描く様々の「象徴」に、（依然として意味は異なるものの）より近い表現となっていると評することができよう。

しかしながら、ここでもヒクメットはルーミー的な「現世は神の影に過ぎず、確たる実在などはない」といった言説を再現している訳ではない。むしろその底流にあるのは、『四行詩集』と共通している。いずれも^今を生きて実在する人間——四行詩における「僕」、即ちヒクメットその人であっても、フィクションのなかの「フェルハド」であっても——としての（社会的、倫理的使命感も含めて）意志と生命感、そして人間的感情としての「愛」をヒクメットは謳いあげる。

7. まとめ

幼いときにメヴレヴィー教団に帰依し、その教説や文学的表現に馴染んできたヒクメットは、それから約30年を経て、弁証法的唯物論の立ち位置から、メヴレヴィー教団の思想的な祖であるルーミーの教説へ存在論的なアンチテーゼをぶつける。

トルコ共和国成立後も連綿と引き継がれてきたイスラーム思想の遺産たる宗教的「象徴」に正面から挑んだ作品として、『四行詩集』はある意味でショッキングなものであったかもしれない。ヒクメットの作品は単にマルクス主義的な唯物論だけを創作上の原理としたわけではなく、その文学的インスピレーションや美意識を、本質的な部分でイスラームに負っていると知るのは重要である。ヒクメットの生涯を通じた宗教への態度については、なおも精密な分析が必要であるが、少なくともイスラームを、なかでもルーミーの思想を、幼少の時以来、一旦は単なる知識以上に体験的に熟知した背景があって初めて、彼自身の言葉を借りれば「西欧にも東洋にもなかった試み」として、このような今なお前衛的と言える作品を書くことができたのである。

確かにイスラーム世界の文学者としては異端的な歩みを辿ったかもしれないが、それでも自分自身の精神的出発点としてのルーミーの思想と真剣勝負で対峙した彼の精神の歩みを示すものとして、中東イスラーム世界に育った文学者としての真摯さというものを彼の作品のなかに読み取るべきではないだろうか。言い換えれば、「ロシア化」されて日本に伝わったヒクメットではあるが、その作品を虚心に原典に却って紐解けば、不謹慎な物言いと受け止められるかもしれないが、ヒクメットの作品をある意味「ペルシア化」することすらできる。別の言い方に改めれば、それだけ宗教、イスラームというものを意識し、正面から向き合ったヒクメットの姿は、単純な政治的アクティヴィストとか、人道主義的、個人主義的といった限定的な「価値観」だけで語りきれない、創作手法の奥深さを備える詩人としての姿勢を示すものといえる。そうした奥深さに、現代トルコにおいて（過去に毀誉褒貶の変転はあっても）ヒクメットが国民的詩人として、多くのトルコ人によって愛好され続けている理由を見ることもできよう。イスラームを経験しトルコのフォークロアをも広く吸収してきたヒクメットの作品に通底する「トルコ性 *Türklük*」を知るという意味では、1960年代に日本で一度受容され、以後一定の政治的イメージだけが独り歩きした、来年（2013年）没後50年を迎えようとしているこの詩人には、日本人に未知のままの部分も多く、解明すべき部分も数多く残されている。無論、日本人の琴線に触れる固有の部分の切り口にして、日本人とつながるヒクメット像があって良い。日本独自の受容の仕方があるという事実は、やはり日本人としてヒクメットの文学を研究するうえで看過してはならないことである。しかし、来年のひとつの節目の年には、筆者自身のひとつの自戒、あるいは自己を叱咤する意味においても、従来のソヴィ

エト・ロシアからの発信の中で半ば陳腐化したヒクメット像ではなく、今度はトルコ語、トルコ文学を学ぶ者のなかから、精神においても、また言語においても、ヒクメットの本来の居所であった「トルコ」に根差しての発信があってもよいのではないかと思う。

附録 ヒクメット略年譜

- 1902 オスマン帝国領セラーニクに生まれる(戸籍上1902年1月15日、実際は1901年11月20日生まれ)
- 1917 ヘイベリアダ高等海事学校入学(1928年以後は海軍士官学校に改編)
- 1919 卒業と同時に巡洋艦ハミディエ号の航海訓練生となる
- 1920 胸膜炎を患い除隊
- 1921 1月 トルコ救国運動に加わるためイネボル経由、雪深い悪路をアンカラへ徒歩で赴く

ドイツのスパルタクス運動に参画し放逐されたトルコ人学生と、イネボルで交流を持ち、マルキシズムやプロレタリア革命の思想に共鳴。当時、このドイツ帰りの学生たちはトルコに戻ってムスタファ・ケマルの救国運動支援に廻っていた。

→ アンカラへの路で、極貧の生活のなかに置かれた農村生活を目の当たりにし、スパルタクス運動の指導者であったリープクネヒトやローザ・ルクセンブルグの思想を知ったことは彼の決定的な政治的思想形成の基礎となる。

アンカラで救国戦争指導者ムスタファ・ケマル・パシャ(のちのトルコ共和国初代大統領ムスタファ・ケマル・アタテュルク)と会う

「若い詩人には『モダン』を気取って、主題の欠けた詩へ逸れる者もいるが、貴方がたは目的のある詩(gayeli şirler)を書きなさい」(ムスタファ・ケマルのヒクメットへの助言)

黒海岸のボルで短期間教職に就くが、8月にゾングルダクへ移り、のちトラブゾンを経由して9月30日にバトゥミ着。

- 1922 モスクワへ到着。東方勤労者共産大学(略称KUTV)に学ぶ

革命直後の高揚感のなかで、帝政ロシア時代と異なる前衛的な芸術の実験が政治的メッセージとともに開花していた時期。スターリン時代の「社会主義リアリズム」に代表される非知性的な文化統制以前の、ロシア・アヴァンギャルド芸術の美意識とマルキシズム思想が、その後のヒクメットの作風に決定的な影響を残す。

- 1923 ◆オスマン朝のスルタン制廃止
◆共和制樹立

Yeni Hayat, Aydınlık等の雑誌への投稿により詩作を公に発表開始

- 1924 ◆カリフ制度廃止

トルコへ帰国。

隠密に出版社と立ち上げようとイズミルへ移る。

- 1925 ◆3月 治安維持法制定

8月12日 アンカラ独立裁判所の欠席裁判で15年の禁固判決を受ける(翌年10月恩赦)
ソヴィエトへ秘密裏に逃走

- 1927 イスタンブルで非合法政党员であるとして、欠席裁判をうけ3ヶ月の禁固刑判決を受ける

- 1928 アゼルバイジャンのパクーで最初の詩集『太陽を呑んだものたちの歌』を刊行

コミンテルンの指示でトルコへ帰国するも、再入国許可を得ぬ不法入国を理由に7月ホバで拘禁
ホバ監獄で、初めて実際の獄中体験 2ヶ月の勾留後に、偽造旅券所持に対して3日の禁固判決
但し25～27年の国外滞在中に起訴された事案に対する訴訟が開始され、10月イスタンブルへ移送

イスタンブルで起訴事案をすべて合併審理とする決定がなされ、アンカラの法廷へ管轄権移送
12月23日にアンカラで、25年以後合併された審理に対して3ヶ月の禁固判決。

→ 7月以後の勾留時間が3ヶ月を超過していたため、即時釈放

- 1929 詩集『865行』、『ジョコンダとスィヤウ』刊行

- 1930 詩集『三番だ!』、『1+1=1』を刊行
- 1931 詩集『声を失った街』刊行
5月1日逮捕
特定の階級への優越的支配を確立する目的により民衆を扇動した罪(刑法311 & 312条)で告発
5月10日 釈放
- 1932 叙事詩『ベネルジはなぜ自殺したか』、詩集『夜届く電報』刊行
- 1933 3月『夜届いた電報』が発禁処分。共産主義プロパガンダの罪で告訴。非公開法廷で審理
6月 審理中でありながら、被告本人がブルサ監獄へ移送され、以後出廷も許可されず。12ヶ月の禁固判決。
同時に4月にトルコ共産党員青年組織23名がイスタンブル、ブルサ、アダナの三都市で政府転覆、ソ連型体制樹立を計画していたとの罪で、集団で告訴される。
ヒクメットもその一員として告発される
ブルサの非公開審理で尋問が継続する間なおブルサ監獄に勾留が続く。死刑求刑
- 1934 禁固5年の判決を受けるも8月4日にトルコ共和国建国十周年の特赦で釈放。イスタンブルへ戻る
- 1935 1月31日 ピラーイエ・アルトゥノールと結婚
叙事詩『タランタ・バブへの手紙』
- 1936 叙事詩『シマヴネの法官の子、シェイフ・ベドゥレッディンの物語』
12月30日 カフェでの行動を挙動不審と私服警官に見とがめられ逮捕
- 1937 4月17日まで拘置が続き釈放
- 1938 1月17日に家宅捜索が入り、蔵書、原稿、手稿などを押収。逮捕
アンカラ軍刑務所に拘置。3月9日 アンカラ士官学校に設置された軍事法廷の管轄で審理開始。
3月11日 軍律不服従や上官への叛乱行為を教唆、扇動した罪で告発(軍刑法94条)
3月29日 禁固15年の判決
5月28日に控訴棄却。次いでイスタンブルへ移送され、マルマラ海南岸に停泊中の戦艦艦内に身柄を拘束される。
8月10日海軍内での叛乱行為教唆の罪で海軍軍事法廷に起訴。審理は軍艦内で行われる。
8月29日の評決で禁固20年を宣告される。アンカラの法廷の量刑との合併で35年の禁固となる。これを減刑し28年4ヶ月の刑期と決定。
→ 軍事法廷の民間人に対する管轄権が有効か無効か、司法省と国防省の間で議論となるも、翌年5月 軍刑法148条改正案が立法府を通過し、軍隊内における共産主義プロパガンダを行った民間人を軍事法廷で裁くことを適法と定める。同法は39年7月14日に発効し、遡及適用されてヒクメットへの軍事法廷判決を有効と認めることになる。
- ◆ムスタファ・ケマル・アタテュルク大統領死去
- 12月29日 最終的に控訴棄却。以後トルコでヒクメットの作品は発禁処分となる。
- 1939 一旦感染症治療を口実に釈放され、その間の国外逃亡を企てるが、トルコ共産党中央委員会の支持を得られず失敗。7月に再度身柄拘束。
長編叙事詩『我が国からの人の点景』執筆開始。
- 1940 1月 チャンクル監獄に収監。
12月 西トルコのブルサ監獄へ移送。収監。
- 1945 第二次大戦終結による恩赦を期待するが、冷戦時代への移行とともに、東欧に勢力拡大したソヴィエトがダーダネルス海峡の管理権を要求。
トルコはこれに反発して、米国寄りとなり NATO 加盟。再度、激しい反共方針に舵を切ったためヒクメットの恩赦の望みも薄くなる。
『ピライエに捧げる21時と22時の間の詩』、『四行詩集』執筆
- 1948 戯曲『フェルハドとシリン』執筆
- 1949 1950年に従前の一党独裁から多党選挙実施を目して、新勢力である民主党への評価を高める材料を求め、Vatan紙の親民主党ジャーナリスト、アフメト・エミン・ハルマンが、8月に同紙でヒクメットへの軍事法廷判決の不当性に関する記事執筆を開始する。
→ 同紙で、メフメト・アリ・セビュク弁護士が法律家としての論考を公表。ヒクメット裁判での訴訟法的な瑕疵や、量刑に対する軍刑法と一般法との仕組みの違い等を論じ、ヒクメットの判決の不当性に関する意見が一般大衆に知らされる。

- セビュク弁護士は、イノニュ大統領への赦免の直接の請願や、ヒクメットの健康状態を理由とした医療上の措置のためのイスタンブルへの移送申し立ても行うが、すべて不調。
- 9月 Vatan 紙記事に呼应し、バリーにヒクメット救出のための国際委員会が結成される。トリスタン・ツァラ、カミュ、サルトル、シモーヌ・ドゥ・ボワーヴォール、ピカソ、アラゴン、イヴ・モンタンなどが参画。
- 1950 2月 国際弁護士連合（International Association of Lawyers）が、トルコ議会、司法省、国防省へアピールを送付し、それを公開する。
- 3月以後、ヒクメットはハンストを行う。これが逐次報道されるにつれて、米国でもロックフェラープラザにあるトルコ領事館前でデモが起こる。
- 4月8、9日 プルサでの医療チェックのうえ、即時ウスキュダル監獄へ移送される。
- 1950 ◆5月14日 共和制移行後、実質初の多政党自由選挙
- 5月14日 最終的にジェッラーフパシャ病院へ収容される。
- ◆選挙結果判明 民主党が408議席獲得・勝利。ジェラル・パヤル大統領、アドナン・メンデレス首相就任
- ◆イノニュ大統領辞任
- 7月15日 包括特赦が議会で承認され、ヒクメットの刑期が2/3の率で減刑。既に満了した収監期間が減刑後刑期を上回ったためヒクメットは即時釈放
- 1951 兵役義務を果たしていないという理由で、軍当局から召集令状を発行しスィワス県ザラ管区への配置を通告される。
- 過去の海軍航海訓練生としての服務実績や病歴、健康状態を理由に兵役免除を主張。医務委員会の検査を希望するも、6月8日にハイダルパシャ病院で兵役不適合とすべき理由はないとの決定が下される。
- 6月17日 兵役に就くためにアンカラへ行くと言って家を出るが、ボスポラス海峡から黒海を通ってルーマニアへ脱出。
- 6月20日 ブカレスト放送がヒクメットのルーマニアのコンスタンツァ港への到着を報じ、翌日トルコのジウムフリエット紙に報道が載る。
- 6月29日 モスクワのヴヌコフスキ空港到着
- 7月25日 トルコ政府はヒクメットの市民権剥奪を決定。
- モスクワ到着後、ヒクメットはスターリン時代のうちに、20年代初頭に知ったモスクワと別世界になっていることを即時実感し、スターリンへの個人崇拝に違和感を覚える。青春期のモスクワ滞在時に感銘を受けた（且つ、スターリンの粛清の犠牲となって処刑されていた）俳優・演出家メイエルホルドなどの消息を尋ねても「知らない、見ていない」といった答えしか返らない。また刊行された自作のロシア語訳の質についても、意味をすり替えるような誤訳に不快感を覚える。ソヴィエト到着後にほどなくヒクメットはスターリンを訪問する予定であったが、このような発言の実績、さらにヒクメットがスターリンに対して個人崇拝を正面から問う意思であったことから、周囲が取り返しのつかない破局を避けるため、スターリンとの会見を中止させ、マレンコフ首相との会見に代替された。
- 「同志スターリンに私は敬意を表するが、かと言って、彼を太陽に喩えるような詩を読むなど堪えがたい。そのような詩は低俗な詩であるばかりではなく、感性が低俗なのだ」（51年にイリヤ・エーレンブルグに語ったと伝えられるヒクメットの発言）
- 以後、ヒクメットはソヴィエトが御膳立てする「世界平和委員会」に重要な役割を果たすことになる
- 1952 ◆トルコは朝鮮戦争へ国連軍として兵員を派遣
- 7月 ベルリンで朝鮮戦争への反戦会議に出席。「米帝」が煽った戦争でトルコ人が派兵され、米国のために血を流すことに反対する
- 年末にワルシャワ訪問。母方の地縁（母方の祖父がもともとポーランド人）があったため、ナズム・ヒクメット・ボルゼンスキイの名前でポーランドのパスポートを発給される。
- 1953 ◆3月5日 スターリン死去
- 1956 ◆フルシチョフによるスターリン批判
- 1957 5月11日 スターリンへの痛烈な批判を込めた戯曲『イワン・イヴァノヴィッチは実在したか？』を初演するも、初日のみで上演禁止処分を受ける。
- スターリン時代の圧迫感がまだ生きており、強権主義的な路線の前に前途の自由が断たれると悲

	観して、ヒクメットは自殺を念慮するほどに落胆	
1960		◆トルコで5月27日クーデター
1961		◆メンデレス元首相 処刑
1963	6月3日	モスクワで死去。
1965	トルコで作品刊行が再開される	
2002	生誕百年記念	
2009	市民権回復	

年表参考文献

Samine Göksu, Edward Timms, *Romantic Communism, the Life and Work of Nazım Hikmet*, 2nd Edition, London: Hurst & Company, 2006.

Nedim Gürsel, *Nazım Hikmet et la Littérature Populaire Turque*, Paris: Editions L'Harmattan, 1987.

Memet Fuat, *Nazım Hikmet Üstüne Yazılar*, Birinci Basm, İstanbul: Adam Yayıncılık ve Matbaacılık A.Ş., 2001.

Orhan Karaveli, *Doğumunun 100'üncü yılında Tanıdığım Nazım Hikmet*, İstanbul: Pergamon Yayını, 2002.